



## □巻頭言

### 感染症とともに

熊本学園大学外国語学部准教授

東アジア学科長 土井 浩嗣

新型コロナウイルスの世界的流行を受けて、書店には、カミュの小説『ペスト』をはじめ感染症関連の本

が数多くならんでいる。かくいう私も山本太郎『感染症と文明』（岩波新書、2011年）という1冊の本を手を取った。麻疹、天然痘、マラリアからエボラ出血熱、SARSまで人類と感染症の長い歴史を知る機会となった。最後に著者は、感染症のない社会を作ろうとするのではなく、

## □学科の最新ニュース！□

今年はオープンキャンパスに代わって、進学相談会&キャンパス見学会が5回開催され、遠く沖縄からも参加いただきました。入試のスタートとなる総合型選抜でも16名の出願がございました。東アジア地域も新型コロナの影響を大きく受ける中、その先を見つめる高校生のおもいを感じる機会となりました。

「共生」の考え方が必要であり、それは決して「心地よいとはいえない」妥協の産物であるとむすんでいる。マスク着用の対面授業は確かに妥協の産物かもしれないが、一方で、これまで以上に真剣なまなざしで韓国語や中国語に取り組む学生の姿が教室にはある。東アジアで人々の往来が再びはじまったとき、今たくわえた力を発揮してくれるはずである。

## □台湾現代詩 楊牧と洛夫

先日、『現代詩手帖』に、「楊牧と洛夫 —— 記憶の風景、流木の美学」という論考を寄稿した。ここではこの台湾現代詩の研究について紹介したい。楊牧(ヤンムー) (1940-2020) と洛夫(ルオフ) (1928-2018) は、戦後台湾の現代詩創成期に彗星のように現れ、半世紀以上にわたり文壇の第一線で活躍し続けた台湾屈指の現代詩人である。この二つの巨星は、ここ数年の間に相次いでこの世を去ったが、彼らが生涯を捧げて産み出した数多くの詩は、台湾現代詩の「古典」として時代を越えて読み継がれ、今なお輝きを放っている。

20世紀東アジアにおいて、常に戦争の「犠牲者」であった台湾で詩を紡ぐという行為は、多難で、重層的な歴史と空間の桎梏がつき纏う。換言すれば、台湾の現代詩人たちは、そうした熾烈な歴史と空間の桎梏からの解放を渴望し、常に漂泊し、自身のスタイルを不断に変えながら新たな詩を紡ぎ続けてきた。少なくとも、この二人の詩人の一生は、解放と漂泊、そして破壊と再生の長い詩的な旅だった。

楊牧は1940年日本統治期の台湾花蓮に生まれ、幼少期の彼は、家庭では台湾語、外では日本語という環境で育ち、1945年の終戦を迎えた。1950年代中期から盛んになった台湾現代詩運動の影響を受け、多感な青春期を過ごし、十五歳から早熟な詩才を発揮した。彼は詩によって記憶のなかの風景を再生することで、愛する郷土を

東アジア学科准教授 小笠原 淳

台湾を詩的メタファーによって永遠にテキストの中に刻印するのである。

洛夫の生涯は、戦火のなかを漂泊する一本の流木のようだった。中国湖南省衡陽に生まれ、国民党の軍人として台湾島に渡った洛夫は、歴史の荒波に押し流され、漂泊を始めたがために故郷に帰ることがかなわず、母の死に目にもあえなかった。しかし、「漂泊」は必ずしも悲劇だけをもたらすとはかぎらない。金門砲戦が起きた翌年の1959年、洛夫は海軍の新聞連絡員として砲撃の続く金門島に派遣され、地下坑道の石室で長編詩『石室の死』(1965)を書き始めた。当時、洛夫は故郷の大陸から飛来する砲弾の下で、死と対話し、心の奥底で深まっていく「孤絶」をシュールレアリスムの斬新な手法で表現しようとした。戦争によって故郷を放逐された漂泊者(=流木)は、大陸中国にも、台湾にも本当の郷土を見出すことができなかった。だが洛夫は詩において、漂泊者の存在を肯定し、歴史の波に流されてもひたすら前へと進む「流木」の美学を表現している。

この二人の詩人の詩的営為は、「台湾」という限定された空間に留めるのではなく、華語語系文学(Sinophon、サイノフォン)、延いては東アジア文学というより広範な文脈に沿って検討していく必要があると感じている。

## □「出張日記」に代えてーコロナ禍における北京の大学事情

東アジア学科教授 李 珊

今年の夏は新型コロナウイルスの影響で日中の往来も止まり、北京の大学への出張はなかった。ここでは現在の大学の状況について紹介してみたい。

中国の大学のキャンパスは一般に広大で、一つの都市のように銀行、郵便局、病院まで設備されている。改革開放後は学内にホテル、西洋や韓国やイスラム料理等のレストランを置き、外部の人も利用できて、観光地にさえなっている。学生は基本的に寮生活だが、街に出て過ごすのも生活の一部となっているようだ。

9月から新年度が始まったが感染防止のため不要不急以外は外部との行き来はできなくなり、教職員を除いて

一般人も入れない。さぞ大きな不便を感じていることだろう。しかし今は、何か食べたければネットで注文し、通販で買える時代だ。学校までの配達には許されている。私たちが学んでいた頃は、全員が寮生活は今も同じだが、食事は学生食堂と決まっていて、メニューは限られ、街に出ても学生が入れるような手頃な店もなかった。それでも不便を感じたこともなく、勉強やスポーツなどの課外活動に忙しく、それなりに青春を謳歌していた。

学生達は今年の突然の外出禁止措置をどう感じているのだろうか。

## □東アジアのあれこれ

東アジア学科教授 申 明直

コロナは動いているもの全てを止めたが、国境を自由に行き来するネットストリーミングは止められなかった。むしろ、韓国ドラマ「愛の不時着」は、今年5月初めのゴールデンウィーク以降、より一層厳しくなっている日韓の壁を乗り越え、3カ月以上にわたり、ネットフリックスでの日本ランキング最上位圏を守り続けている。それだけではない。他の韓国ドラマの「梨泰院クラス」と「サイコだけど大丈夫」もまたトップ10内に入り、これら3つのドラマが1位から3位に並んでいる事も少なくない。

韓国の大手エンターテインメント会社である JYP と

日本のソニーミュージックが共同企画した「Nizi プロジェクト」にて誕生した日本人9人グループ「NiziU」のアルバムは、7月の配信開始と共に、日本のオリコンデジタルチャート3部門にて同時1位を記録した。最近再び吹き始めた韓国ドラマブームと日韓合作ミュージックプロジェクトの大ヒットは、ある意味突然吹き寄せられたコロナ風による「ステイホーム」の副産物なのかもしれない。コロナ風に乗って「不時着」した日本の韓流「愛」が、南北の壁も乗り越えたドラマの中の主人公たちのように、凍りついた日韓の壁も溶かしてほしい。

## □新書紹介

### 松岡雄太『長崎唐通事の満洲語学』

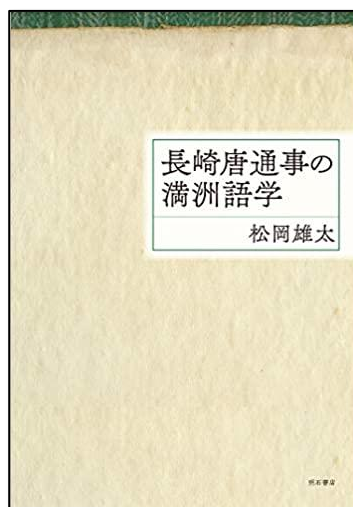
(明石書店、2019年)

長崎では、オランダ語通訳とは別に唐船貿易の業務のため唐通事と呼ばれる中国語通訳がいた。19世紀初の外船の相次ぐ来航に幕府は、唐通事に清国の言語、満州語の学習を命じた。本書はその満州語学を解明したものである。

著者は九州出身、現在は関西大学外国語学部の准教授で、朝鮮語、モンゴル語、満州語を対象とした言語学が専門である。著者が長崎の大学に勤めていた折に、長崎歴史文化博物館所蔵の通訳たちが編纂した2種類の辞書を研究し、その編纂過程、語彙、音の表記、満州文字の綴り、さらに日本語訳を手掛かりに文法理解など、彼らの満州語の理解を詳しく調べた成果である。

母語話者がいないなか、唐通事たちは一部のみ輸入された『清文鑑』を研究し、音を漢字の音韻から推定し、文法を日本語から理解していった。本書には、語学の教材が溢れた現代の日本人にとって想像を絶する努力の過程が言語を素材に見事に描かれている。

(東アジア学科教授 矢野 謙一)



### ■編集後記■

東アジア学科では専門科目がほぼ対面授業となり、ソーシャルディスタンスを保ちつつも学生とあれこれ話す時間が増えました。新型コロナの終息はまだ先とはいえ、穏やかな日常が少しだけ戻ってきたように思います。コロナ禍のせいか、最近無性にいろいろ本を読みたい気持ちが強くなっています。世界が動きを止める中、静かに本と向き合うのもよいのかもしれません。(ど)

発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科

編集人 土井 浩嗣 (東アジア学科長)

〒860 - 8680 熊本市中央区大江 2-5-1

Tel 096-364-5161 (代表)